

慈眼寺と江口の君

野崎観音で知られる慈眼寺の三十三所観音堂の裏手に鐘楼があり、ここには宝永5年（1708）に鑄造された梵鐘ぼんしんがあります。この梵鐘には、慈眼寺第五代住職の大真が記した寺の縁起が刻まれています。

この縁起によると、平安時代、江口長者とも呼ばれた江口の君は、病氣平癒のため奈良の長谷寺観音に参詣し、夢告を受けて慈眼寺の十一面観音に参詣したところ病気が治ったため伽藍がらんを再興しました。その後、永仁2年（1294）に入蓮と秦氏によって伽藍が修復されましたが、戦国の争乱によって堂宇が灰燼かいこんに帰してしまいました。江戸時代になっ

て曹洞宗の僧侶である青巖が入寺したため、以後寺は曹洞宗となり、第四代住職嶺南によって、観音殿・薬師堂・台所・寮舎などが再興されました。さらに大真の時、梵鐘を鑄造することとなり、寺の縁起を後世まで伝えるため梵鐘にこれ

が刻まれたということです。

さて、縁起にも見られるように、慈眼



梵鐘拓本

寺の歴史と深く関わりのある江口の君とはどのような人だったのでしょうか。「江口」とは摂津国の淀川と神崎川の分岐点（現・大阪市東淀川区）と思われる。しかし、慈眼寺が所蔵する江戸時代に書かれた「江口之君縁起」によると、君の生国ははっきりしませんが、一条天皇の女官であったともいわれています。容貌清雅で、播磨国書写山田教寺（現・姫路市）の僧性空は、君を拝んだところ普賢菩薩に見えたことや、西行法師が四天王寺参詣からの帰りに一夜の宿を借りるため君と和歌の送り合いを行ったと記されています。

ここに見られる性空の伝記や、西行との和歌のやりとりの話は鎌倉時代の説話集にも見られ、室町時代には能の名手として著名な観阿弥・世阿弥の能台本「江口」に取り入れられて広まってきました。さらに江戸時代になると、「江口」に関連して、江口の君と西行が和歌をやりとりする場面や、遊女の君が白象に乗った普賢菩薩として絵画に描かれ、庶民の間でも広く親しまれていくこととなりました。

慈眼寺では、このように広く庶民にまで受け入れられていった江口の君を寺の縁起に取り入れることで、たくさんの人から親しみを持たれるお寺にしようとしたのではないのでしょうか。

梵鐘の拓本と「江口之君縁起」は、歴史民俗資料館で現在開催中の「慈眼寺と野崎まいり」展で展示しています。

（大東市立歴史民俗資料館）